

# ぶらす

出居清太郎ワールドへのご招待

No.108  
2019・春

つきたてのお餅の心

(1) 持参した土産物をたたきつけられ

人間はいろいろの心を使うが、その中でも一番恐ろしいのは、ねたみ、そねみ、うらみである。この心を使うと、そういう思いをしたというだけではすまない。必ず利子がついて返ってくる。だから恐ろしいのである。

私はむかし、質屋に行つて金をつくり、それで土産物をととのえてある先輩を訪ねた。ところが相手はけんもほろろの態度

で悪声をあびせかけて、せつかくのお土産を土間にたたきつけた。それでも私は腹も立たなかつた。残念にも思わなかつた。この悪声こそ私の魂を太らせる肥(声)であると感謝し、捨てられた土産物を押しただいて帰つた。

嘲笑されたり、ののしられたり、少しでも侮辱にあつと、人はなかなかその屈辱に従えない。そこに「うらみ」の心がわく。恨んだからとて幸福が来るものではない。

私は人間に降伏したのではない。そのよ

うな目にあわせてくださる神に降伏したのである。仕方なしの降伏ではない。感謝を添えての無条件降伏である。降伏は幸福である。神への降伏が人間の幸福であることを忘れてはならない。

(出居清太郎先生の言葉から)

人から自分にとっていやなことをされたら、不満や怒りの気持ちを持ちます。その気持ちの最たるものが恨みでしょう。できればそんな気持ちは持ちたくないわけですが、それは可能でしょうか。

浄土真宗の開祖親鸞は、師の法然に導かれて念仏の道に入りましたが、師に従ってこの道を行くことによつて、たとえ地獄におちることになつても後悔しないと断言しています。ここには親鸞の、師の法然に



ふきのとう (カット・大西 恵)

対する絶対的な、無条件の信頼があります。誰かからイジメられた、バカにされた、無視された その時、辛い、苦しいけれども自分に起きるべくして起きたことであり、これが自分の成長の糧になるのだと思えば、そのことをのろつたり、その人を恨んだりする気持ちは出てこないだろうと思います。

それは「自分に起きるどんなこともすべて起きるべくして起きたことであり、それは必ず自分の成長の糧になる」ということに対する、無条件、絶対の信頼です。

無条件、絶対に信頼できる師や友人や結婚相手に巡り合えたら、それは人生最高の幸福でしょう。

絶対に信頼できるものに無条件に従うことを、出居清太郎先生は「神に降伏する」と言っています。してみると、「降伏は幸福である」とはまさにその通りなのではないでしょうか。

## (2) 包丁には包丁の持ちようが

包丁には包丁の持ちようがある。正しく持つてはじめて用を足すことができる。心

にも持ちようがある。「心持ち」というが、心をいつもつきたての餅のようにならわらかく持つのが正しい心の持ち方である。

ところがその心が、日がたった餅のようになりコチコチに固くなる。こつになると全く融通性がなくなって、心の働きがなくなってしまつ。固くなるばかりではない。そのうちにひび割れがし、青カビ、赤カビまで生えてくる。持ちも下げもならぬ心の姿とはこつこつ心をつ。

## ( 出居清太郎先生の言葉から)

うれしい、楽しい、悲しい、さびしい…その時、その場でさまざまな心が生じます。ただ、同じ状況、同じ出来事に対して、みんなが同じ心を持つとは限りません。人に注意されて、よけいなことをと恨みを持つ

人もいれば、有り難つと感謝の心を持つ人もいます。

その違いはどこからくるのでしょうか。

たとえば、コンクリートの上に瓦を落とせば大きな音がして割れますが、耕された土の上に落としたり、瓦はただ土の上になるだけです。

つまり、ある出来事や状況に直面した時にどういつ心が生じるかは、その人の持っている心の性質によるということではないでしょうか。

どういつ時にも、あたたかく、明るく前向きな心が生じるような性質の心、それ

は「つきたての餅」のイメージとピッタリです。

## 編集後記

先ごろ、厚生労働省による毎月勤労統計の不正調査が明らかになりました。政策決定のための基礎資料が信頼できないとなると困りますね。私たちの周りにはたくさん情報があふれています。そのうちどれが信頼できるのか。本当に信頼できるものに出会えたら幸せですね。

次号は10月1日発行です。(H・Y)

平成 31 年 3 月 1 日発行

ふゆのあり 711 号付録

ふらす α 平成 31 年春号(通巻 108 号)

編集人 山本博也

発行所 〒170-0011

東京都豊島区池袋本町 3-11-1

修養団捧誠会 青少年委員会

TEL 03-3397-1149